

## 新刊書のご案内:

此の度、ドナルド・メルツァー & マーサ・ハリス共著の『The Educational Role of the Family : A Psychoanalytical Model』(edited by Meg Harris Williams. Karnac books. 2013)の邦訳本『こどものこころの環境—現代のクライン派家族論』(木部則雄+池上和子ほか訳 山上千鶴子解題)が金剛出版より刊行される運びとなりました。



この書は、家族というものについてクライン派的な視点からメスを入れた、とても刺激的な内容になっております。心理臨床家に限らず、教師、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーなど対人援助に携わる各職種の皆さん方にご関心を抱かれるものと思われまふ。何よりも特筆すべきことは、読み手にとって、それぞれ自らが常日頃見聞きする事象が多視点的に新たな意味がもたらされ、知らずのうちに触発されることでもあります。この点でまさに「Learning from Experience (経験からの学び):ピオン」の書といえまふ。ぜひご一読をお薦め申し上げます。

この邦訳本には、「解題」として、私が2016年に書き綴りました「わが回想 —“親なるもの”を希求して」が載っております。このメルツァーご夫妻共著が訴えんとする骨子に呼応するかたちで、私自らの来し方を俎上に乗せて論述したものです。ここにひとまず皆さま方にご覧いただくことに致しました。ご興味いただけますならば幸いです。(2018/12/10 記)

\*\*\*\*\*

### 【解題】

#### — わが回想 — ‘親なるもの’を希求して

山上 千鶴子

私は1972年にイギリスの地を訪れ、翌年タヴィストック・クリニック(Tavistock Clinic)のチャイルド・サイコセラピスト養成コースに日本人として初めて訓練生(trainee)となった。これはすなわち、故知らずマーサ・ハリス並びにドナルド・メルツァーというお二人を私が‘親’にしたということになる。そして歳月を経るにつれ、それは「私が私になる」ためには必然であったとの思いが募る。本書の主論文であるところの『A Psychoanalytic Model of the Child-in-the-Family-in-the-Community』(1976)は、そもそも彼らがUNESCOから諮問され、それへの答申書として共同執筆したものであるわけだが、おそらく精神分析家としての彼らにとっては一つの‘総決算’であったろう。文面に漲る気魄に圧倒され、彼らの真面目に改めて衝撃を覚えた。わが国での翻訳出版を機に、この論文の骨子とも絡ませながら、「私というものの成り立ち」を回顧し、やがて私がどのようにして彼らとの因縁に繋がったのかを証してみようと思う。

それは誰にも覚えのあること。朝起きれば学校へ行く、それが当たり前。それが日常のなかで、ふと幼き心に一抹の懐疑が浮かぶ。〈なんで学校に行かなきゃなんないのかな？なんで勉強しなくちゃなんないのかな？〉と…。我が家では、両親が殊更に‘教育熱心’というわけではなかった。ただ小学校の低学年の頃から、夕食後に国語と算数のドリルをやらされ、それを父親が添削してくれたぐらいで…。だから勉強のプレッシャーというのが格別あったとは思われない。それよりも、大人になるということが茫漠とした感じで、自分が今ここにアルということが未来のどこに、そして何に繋がるものやら、皆目見当も付かないことに怯えていた。ランドセルを背負いながら学校に通う。その重たさとは違う何かを己の背中に重苦しく感じていた。自分が〈在る〉ということの不確かさである。未来へのわけのわからぬ不安に今の私が押し潰されるような…。それなのに、大人の誰彼から期待を我が身に受けることがあった。私は何故かいつも「期待される女の子」であったのだ。そう言えば、小学校一年の学芸会の舞台上で、参列した父母たちに向けての《はじめのご挨拶》をさせられたっけ…。学校の先生というものは子どもたちに期待するものだ。そこに善意が溢れていたとしても…。私は期待されることが苦手だった。つまりは、愛されているというわけだから、その感覚に抗う自分も変なのだが。しかし期待を寄せられる、その途端に‘私の未来’は窮屈になった。その期待の中に閉じ込められたようで…。仕掛けられた罠、そんなふうに思えた。しかしながら、〈そんなの私なんかじゃない！〉と、それに刃向かうほど‘わたしなるもの’の経験もなし、知力も無論ない。〈ただひっそりとしていたいのにな…。〉と内心呟くのみで。〈私は誰からの期待も要らない。でも私は自分にどんな期待をしているといえるやら…。〉と自問せざるを得ないわけだが、でも到底答えは見つかりそうにない。そんな内気ながらもどこかしら厄介至極な子ども、それが私だった。

親たちは若く、戦後の慎ましい暮らしのなかで切り詰めた生活があった。父親は自衛隊の技術士官で、しばしば赴任先が変わり、引越しが多かったから、家の中に蔵書といえるほどのものはなかった。辛うじて「大百科事典」といったものが書棚にずらっと並んでいたのを記憶している。僅かな給料から工面して購入したものであろう。当時では唯一それが‘文化’を意味していたから、父親の気概と誇りがちょっぴりそこに覗かれた。他には父親の技術関連の専門書、それに父親が使い古した辞書類が幾らか並んでいた。そこに英和辞典もあったわけだが…。覗いてみて、ちょっと不思議な感覚だった。民謡やら浪曲をラジオで聴くといった、そんなのが家族の楽しみ。そんな暮らしに余裕などなかったはずなのに、妙にのんびりしていた。職場では「千人に一人の逸材」と評されていた若かりし頃の父親は、子どもの眼から見ても凛々しく誇らしかった。庭で弓の稽古に励む父親の周りをウロチョロしている幼い私の姿が浮かぶ。父親が的を狙って射った矢を追いかける。コスモスが風に揺れていた。草叢に蛇がいるんじゃないかと恐れたり…。姉も妹も傍らにいた。母親はいつも澆<sup>ま</sup>瀨とのびやかで覇気に溢れていた。器用に自己流にデザインし、ミシンやら糸編み機で手作りした服をいつも私たち娘三人に着せてくれた。そのぬくもりに包まれ、貧しさのなかに貧しさを知らないつもりでいた。

或る日、確か小五の頃だったか、私は学校からの帰途、霞ヶ浦を見下ろす高台の麦畑のなかを歩いていた。足元の小石に目を止め、自分がここに「在る」という感覚に突き動かされ、不思議を感じ

た。反動的にその小石をぼんと靴の爪先で蹴った。コロコロと転がるそれを眺め、自分の‘未来’が動いた。どこか「別の違うところ」というのがぼんやりと思ひ浮かんだ。＜私は私を好きなように生きてやろう！誰にも未来を決められたくない…。＞ 密かにそう思ったのだろうか。何故か不意に英語を勉強したいという気持ち<sup>もた</sup>が頭を擡げた。当時「阿見小学校」での担任は日沢先生とおっしゃる若い男性教師で、私に目を掛けてくださっていた。家庭訪問にやってきた折には、何やら母親と話し込んでいた。彼の眼には母親は教育熱心と映ったらしい。当時子どもたちの間では何かしらお稽古事をするのが流行っていて、姉は人形づくりの教室、妹は日本舞踊に通っていた。さて私はどうするかと母に訊かれて、英語を習いたいと返答した。どうやらそのことを日沢先生は聞いたらしい。或る日彼から英語のアルファベットの綴られたノートが私に手渡された。それらの異国の字をたどたどしくなぞることから手習いが始まり、それを彼が添削して返してくれた。やがてそのノートに少しずつ英単語が増えていったが、またもや引っ越して転校したわけだから、その英語の勉強もごく短い期間でしかなかったけれど…。

いつか思春期の私は、考えることを始めた。それはいいのだが、往々に行き詰まり感が募り、溜め息まじりのくわらない…>が口癖の妙な女の子になっていった。「与謝野晶子」の詩歌をこころの内<sup>うち</sup>で反芻する。それはまるで‘檄文’といってもいい。＜一人称にてのみ物書かばや>といったこと…。そんなこと言われても…と戸惑い尻込みするばかりで。そんな不甲斐ない、煮え切らない自分に嫌気が差し、閉塞感に逃げ込んでしまう。そんな折、カソリック系の或る女子高に特待生制度というのがあるから受けてみたらどうかと担任の教師から勧められ、受けたら受かった。教師たちは喜んでくれた。親たちも喜んだ。私は自分の身に起きたことがよく分からず、ぼんやりしていた。西舞鶴にある「聖ヨゼフ学園・日星女子高等学校」というのがそれであったが、特待生は授業料免除だけではなく、進学指導、つまり大學受験のための優遇措置がいろいろあった。つまり少数制英才コースというわけ。私は、誰かの期待を背負う羽目になってしまったと、この想定外の事態が面映かった。そして何よりも、いつも姉の背中を見ながら、その後を付いていっていた私だったのに、或る日から突然毎朝の通学路があつとこつとまるで反対方向となった。姉は自転車で東舞鶴高校へ、私はバス停からバスで西舞鶴の日星高校へ向かう。バスに乗りながら、一人妙に心細かったのを今でも覚えている。何故だかちよびり恨めしいような…。

私の父方の祖母は生前クリスチャン(プロテスタント系)だった。若くして子宮癌で亡くなったその母親を追慕し、父親はずうとわが家でクリスマスを祝う習慣を続けていた。それは疎開先の母の郷里の秋田から父親の赴任する北海道・旭川の駐屯地へと移り住み、家族が共に暮らすようになって以降のことで、幾らか成長した私たち娘三人を喜ばそうとおそらく思ったのだろう。サンタクロースさんを天辺に電球がピカピカ飾り立てられた縦ノ木のツリー。そして丸いちゃぶ台に白いレースを覆い、そこにクリスマスケーキが置かれ、家族皆で「きよしこの夜」を唄い、祝う。それが精一杯の異国から持ち込まれたわが家の‘文化’であったわけで…。

「日星高校」は、それとは格段に違う真正の「異文化」であった。だから肩身の狭い思いをしたとも思わないが・・・。何しろすべてが見慣れぬことで、ある種‘奇異な’風景ではあった。校長さまをはじめとして教師たちのほとんどが日本人の修道尼で、あの黒いベールがあちこちに闊歩していたのだから。勿論私服を着た教師たちはいるにはいたが・・・。カナダ系の神父さまたちが時折御ミサを先導しに学校を訪れてみえた。そこには寮があり、全国津々浦々から熱心なカソリック信徒の子女たちが送り込まれていて、その多くが将来は修道尼になるべく運命づけられていた。彼女らは何ら屈託の無い顔で寮生活を日々営んでいた。宗教の時間に聞かされる校長さまの説かれる「公教要理」は一向に私の心に響いてはこなかった。信徒ではない私だから、敢えて物申すといったことはなかった。妙だなと時折首を傾げることはあっても・・・。

隣には病院が併設されていて、そこではカナダのシスターたちが医療従事者として奉仕をされていた。やがて私は彼女らのお住まいに英会話を習いに足繁く通うようになった。パンをオープンで焼いたようなかぐわしい匂いがほのかに漂っていた。ダイニングルームを覗くと、テーブルの上には布製のナプキンがリングに嵌められ、各自の席にきちんと並べられてあった。華美を一切排した、その簡素で清潔なお暮らしぶりがむしろまぶしかった。彼女らには‘個人’としての生はない。だが何と聞達で明朗なんだろうと、一人ひとりのシスターの青い目を見入った。

そんな折のこと、或る日突然数学の教科担任でもあった伊藤先生が教室にやってきて、クラス担任が変わったことを皆に告げた。化学の教科担任であった吉国先生という女性教師がクラス担任でもあったのだが、その吉国先生が修道尼になるための誓願を立てられ、学校を去られたんだと言う。まったくの寝耳に水というか、誰もが驚いた。まるっきり‘神隠し’みたいだった。彼女が神様に‘拉致された’というのも変だが・・・。事実そんな感じで。勿論彼女の意志の赴くところに彼女は行ったのだろう。そしてそれを彼らは‘召命’と呼んでいる。誉れというわけで・・・。日常(ここ)から非日常(どこか別のあちら)へと越境したかのように、私たちの眼からその存在は掻き消された。その向こう、つまり信仰に生きるといった、自ら選んだあちら‘異界’で、彼女は「シスター・ローズリン・吉国」としてその後を生きてゆく。ただただそれが不思議として記憶された。やがてその10年余も後にだが、奇しくも私は彼女にロンドンの地で再会している。もはや何の繋がりもなかったのに、何故かふいと気まぐれに近況を書いて舞鶴の修道院気付で彼女宛にエアレターを日本に送った。それがなんとフランスへ転送された。当時彼女は彼の地での研修の真っ只中であつたようだ。やがてそれも終えられて、日本への帰途ロンドンに立ち寄られたのであつた。ロンドン郊外の或る修道院に私は彼女を訪れた。それはいかにも由緒のある貴族の館といった瀟洒な建物で、明るい陽射しのなかをご一緒に内庭のバラ園を散策した。久し振りの日本語で思う存分語らうことができた。そして彼女の‘その後’を見届けた。そのたおやかで凜としたお姿が内なる光に照り映えるさまを認め、私は深く安堵し、かつ励まされたのであつた。その折のこと、彼女のお父さまがその昔憲兵であつたとも打ち明けられた。戦地から生還後、細々とした暮らしのなかで彼が忍んだ慙愧の念についても・・・。詰まりのところ、シスター・吉国は神に仕える身にあつて、己の父親の‘無明’を一途に背負われておいでなのであつたろう。「非存在」という耳慣れぬ言葉を初めて伺った

のも彼女からであった。カソリックの信仰はさまざまな変革の波に洗われ、今や魂の救済は信者たち個々の内なる非存在を穿つ<sup>うが</sup>といったふうに‘個’のレベルへ降りてゆこうとしていた。そこに精神分析への接近が覗われ、何やら光明を覚えたのが忘れ難い。そしてそこで修道院長さまをはじめ他のシスターたちの慈愛のまなざしに包まれ、私たちはご一緒におもてなしの夕餉までいただいた。懐かしい思い出である。

振り返って思うに、まだ十代だった当時の私が、私たちの目の前から忽然と掻き消えた一女教師に強く愛着していたわけでは毛頭なかった。だがあの聡明な彼女が見つけたものが何であったのか、それが気掛かりであったわけで。またそこには一抹の羨ましさがあったのも事実だ。信仰でも信念でもいい、私も何かしら‘信(faith)’と呼べるものが欲しいと願った。それは‘恩寵’でないはずはなからう。試練だとしても…。信徒になれない私なのだから、おそらく彼女とは別のかたちなのだろうが。どこに己の‘身の捨て場所’があるやなしや。そうした‘信’はどこにあるのか、何なのか。探しものが密かに始まった。誰にも相談せず、一人で悶々として…。その頃から、受験勉強に熱が冷めてゆく。まるっきり‘生け簀の中のお魚’みたいに<sup>もや</sup>靄がかった視界をひたすら睨んでいた。時間の意識などほとんどないままに…。

やがてその息苦しさから思い切ってポンと飛び跳ねたといった具合に、意外なところに私は居た。「愛知県立女子大学・児童福祉学科」に私の籍はあった。現在の「愛知県立大学・社会福祉学科」の前身だ。そこから幼稚園教諭の道もあつたらうに、どうか息が楽になった頃には、私は俄然「情緒障害児」とか「子どもの心理療法」とかに目が向いていた。二年目になり、「愛知県立大学」の社会福祉学科の教授として「大阪市立大学」からわざわざ招聘されてこられた本出祐之先生の講義を受け、「精神分析」というものに初めて触れた。＜精神分析とは、自己欺瞞を暴くもの＞といった概説書のことはがとにかく自分の胸にフィットしたのである。俄然‘己の身の捨てどころ’を得たといった直観が閃いた。自分の未来をそこに見出した。さて誰に教えを請うたらいいものやら。取り敢えずは参考文献を漁った。手近なところで「臨床心理学」担当の蛭川栄先生の研究室からありつかけの参考図書をごっそり借りた。児童心理臨床へと舵を取り、果敢に攻めていった。それにも飽き足らず、やがて参考資料がすべて原書ということになった。「ブリタニカ」を利用してアメリカから資料を取り寄せるやら、主にアンナ・フロイトが主筆だった「*Psychoanalytical Study of Children*」というジャーナル誌に飛びついて、それを借りるのに「名古屋大学」の教育学部の図書室に出掛けたり…。「名古屋市立大学病院」の精神科病棟にも赴き、医師の診察に立ち会うやら、そこで幾人か問題を抱えた子どもさんの相手をさせてもらうやら…。意気軒昂だった。そして、どうか纏めたのが卒論《児童分析と子どもの精神病理—心理治療の原理についての一考察》であった。指導教官は本出先生で、それにその当時京都大学教育学部の博士コースを修了されたばかりで助手としてお越しの吉野要さんが付き合ってくださいました。有難かった。本格的に勉強するならいつかは留学というのが念頭にあったが、取り敢えずはと「京都大学教育学部」の修士課程への進学を希望した。口頭試問があり、そこで＜あなたは将来どんなことをしたいのか＞と尋ねられ、＜児童臨床心理学を体系化したい＞と答えた。＜それは‘大家’がすることですなあ…＞と倉橋主任教授がいくらか揶揄するようにおっしゃった。それ

で梅本教授始めそこに居並ぶ教授達がドツと笑った。だが結果から推して、とにかくその折の私の気概が買われたらしい。

いつか気がつくと、私は「京大教育学部」の地下の「心理教育相談室」のプレールームで、子ども相手に白衣を着て、嬉々としてセラピーに打ち込んでいたのである。助手の田畑治さんが感心したふうにおっしゃる。＜山上さん、セラピーを終えたときって、いつも輝いてますねえ！＞って。事実そうだろう。面白かったのだから・・・。だが内心は大いに躓いていた。治療プロセスの論理づけがまるで出来ない。直感めいた共感が出来ても、筋立てが出来ないから、まともに言語的介入するスタンスを取れずにいる。ここに長居は無用。やはり本格的な児童セラピーの訓練を受けなくてはどうにもならない。そう思うようになっていった。

そこで父親に訴えた。日本の児童臨床の実態がいかにお粗末か、どうしても海外で本格的なトレーニングが必要だ、どうしても留学したいと私が言った折、父親は訝しげな表情をして＜事情はわかったけど、だけど何故チズゴがそれをしなくてはならないのか＞と問うた。すぐさまそれは、私にはやれる自信があるからよ>と、臆面もなく私の‘内なる声’は言い放った。だが勿論そのままを直接父に言えるわけもなし、黙るしかなかった。要は、金の工面をどうするかということなのだったから・・・。

実はこの当時、私の母親は東舞鶴の或る肢体不自由児の治療施設で看護婦をしていて、職員同士の人間関係の難しさにほとほと憔悴していた。かつて看護学校を首席で卒業した程のなかなか出来物の母ではあったが、子育て期間と度重なる引越しでそのキャリアに長いブランクがあった。復職してから、さぞ難儀があったろう。それで私が母親の話を聞いてあげたことがあった（つまり‘模擬カウンセリング’みたいなこと）。その折の経験から母親は、＜チズゴには精神分析の才能がある！＞と単純に私を見込んだ。だから留学を支援するという構えでいた。＜秋田の実家から借金してでもチズゴを留学させる＞と、母親は一図に迷わなかった。一方父親は元来几帳面な人で、人生やら家族の行く末を‘設計図’みたいに堅実に緻密に考えていたわけだから、娘の海外研修留学などまったくの想定外で面喰らった。彼にしてみれば夢みたいな話でしかないわけだから、ただ戸惑い、白けて不機嫌に押し黙るだけ。それで当然ながら夫婦間に亀裂が生じ、陰悪なムードとなっていた。ところが、その諍いの種なる当人の私はというと、＜子どもが育ってゆくことを援助するのが親というものだ＞と内心信じて疑わなかったから、こうした事態にも恬<sup>てん</sup>として恥じない。経済的な負担は二の次と思った。金など無いと言えども勿論無いのであるから・・・。母親の口癖は「世のため、人のため」というのだった。それを盾にして、私は攻めまくったというわけで。とにかく何とかしてくれると親を信じたのだ。ここらの強気は今でも我ながら呆れる。オソロシイ！＜信念<sup>はためいわく</sup>というのは時として傍迷惑ともなる＞というのが私の持論の一つだが、つまりそれは私自身のことであり、そこには自戒の意味も込められている。今尚も当時を振り返り、わが両親には心のうちで何万遍も詫びている。

ちなみに、渡航費だが、往復の飛行機代が当時46万円であった。ちょっと今では信じられない価格だが。なぜこの数字を覚えているかというと、<sup>おか</sup>可笑しいことがあったからだ。或る日、私は父親と一緒に、京都河原町四条の「田中彌」という京人形店の店内にいた。そこで一体の女の子の京人形に見惚れた。それがなんと46万円の値が付いていた。それで傍らの父親に、<お父さん、見て見て！この人形さん、イギリスへの飛行機代と同じだよ。こっちにしようかな>と、私が言った。彼は、<そうしな・・・>と冷たく言い放った。おそらく<チズコの留学への固い意志などナンボのもんや！>と内心せせら笑うところがあったろう。ところが能天気な私はその美に撃たれ、店を出ても、頭のなかはポオーツとしたままで、そのお人形さんと渡航費とがシーソーしている具合であったのだから、どうにも呆れる。しっかり者の姉は、そんな<sup>むらき</sup>斑気なところのある私なんかよりもぐんと父親に信用があった。口添えしてくれた。<まあ、ちょっとばかし行かせてあげたらどうやろ・・・>と。それでどうにか父親が折れた。旅費と小遣いを用意してくれた。私は当時京都市職員であり、「若杉学園」の母子通園施設でプレイセラピストとして療育に携わっていた。そこを1年も満たずささと退職し、それで京都市から僅かながらも退職金が支給され、さらには園の皆さま方からお餞別ならびに心温まる激励の言葉を頂戴し、1972年6月、意気揚々と私は日本脱出を図ったのであった。

それから渡英後、確かに苦勞したと言えれば苦勞したことになる。英語学校に通うことが何よりも優先されたにしろ、まずはオペア(家事手伝い)から始まって、住み込みで子どもの養育に携わるナニーやら、時折の臨時のベビーシッターやら・・・。しかしながらその苦勞は、まさに‘確信犯的’なものであって、つまりは将来チャイルド・セラピストの修業のために備えてという名目に適うものに限り、それ以外のことはどんな苦勞も何一つしていない。当然そのツケは親に回されることになったわけで・・・。

さて訓練機関をどこにするかであったが、最終的にタヴィストック・クリニックに焦点が見定まるにも時間を要したが、マーサ・ハリスとの最初のインタビューの予約を<sup>もら</sup>貰うのに六ヶ月以上も待たされた。ついに出会った頃には、私はあちらの人とのやり取りのコツもわきまえ、面接中その最後の辺りで彼女が何やら吃ったのを耳にしてアラツと思ひ、彼女のナイーブそうな印象に心が動いた。それにしても現実は厳しかった。コースへの希望者が殺到しており、つまり順番待ちで、だから取り敢えずのところセミナーに一つか二つぐらい参加することから始めてはどうかというのが彼女の提案であった。承諾するしかなかった。だが、トレーニングの期間は四年と思っていたから、これで一年延び、あと五年かと思うと、帰途涙がこぼれた。いい加減ホームシックにもなっていたのだから。ところがそれからしばらくして、タヴィストックから通知が届き、私は正式にフルタイムの訓練生として受け入れられた旨がそこに記されており、アレツと意外でもあり、でも嬉しかった。どうやらマーサ・ハリスに気に入られたみたいだと一瞬思う。それも、何よりも‘経験重視’といった先方に‘受け’を良くするために私が心掛けた‘戦略’が功を奏したわけで、それも狙いどおりと思つた。だが、相手に本気にされた時点で内心ちょっと慌てた。こちらも本気になることが求められているわけで。すなわちまずは親を説得し、援助を取り付けなければならないということになる。その頃には彼の地で労働許可証(ワーク・パーミット)を取得し、児童養護施設・ホリスでハウ

ス・ペアレントのアシスタントの仕事に就く見込みだったから、まったく採算のない話でもなかったが。親にはもう平身低頭して拝み倒すしかなかった。家族の皆は感心するやら呆れるやら・・・。

そのうちもはや引き返すことも立ち往生も許されない事態となってゆく。マーサ・ハリスの推薦を得て、セント・ジョージ病院(St. Goerge's Hospital)の児童精神科病棟の訓練セラピストとして就職が決まった。そこで上司になったのが、マーサ・ハリスとは昵懇の間柄で、かつてタヴィストックでの同僚でもあったMr. ジョン・ブレンナーである。どうやら私は彼らに期待されているらしいということがジワジワと肌身で感じられた。前に進むしかなかった。まだ当時は私の意識では、クライン派なるものを他の流派と比べて云々できるには程遠く、ある種‘視野狭窄’っぽい印象で、ただセラピストとパーソナル・アナリスト、それに折々の赤ちゃん観察やら「プレイグループ」の子どもたちの遊戯観察やらを行ったり来たりの日々であった。自分が随分と背伸びしているのは分かっていた。親にまるっきり経済的に<sup>もた</sup>凭れかかっていることの負い目で心が潰されるような、申し訳なさがあった。実際のところ、日本では両親間には私を援助する・しないで摩擦があり、母親のなかに長年溜め込まれていた父親への鬱憤も噴き出し、あわや離婚といった危機にも至っていたのである。姉がいつも執り成し役で、ことを収めてくれた。私はロンドンから奮闘するさまを一部始終書き綴って折々にエメールを送っていたから、一応私の事情は察していたとしても、家族は皆誰もが内心ただ呆れていた。

或る日のこと、遠路<sup>はるばる</sup>遥々日本からぎっしり懐かしいものがいっぱい詰まった小包が届いた。そこに一つカセット・テープが入っている。再生して聴くと、流れてきた音からどうやら家族揃っての団欒の場らしい。何やら皆がご馳走を食べながらべちゃべちゃとお喋りしている。やがて母親の声がした。<(チズコを)世のため・人のためにするのもえらいことやなあ。ほんまにあの娘はそうなるんかいなあ・・・>とポロリと本音を吐いた。家族皆がドツと笑った。ちょっと場がシーンとなり、それから<ほんまに、あいつは分かかってんやろか・・・>と、姉がちょっと声を荒くした。<分かてるやろ。今あっちで苦労してるんだから・・・>と執り成すように母が応える。<でもさ、行ったひとが得よね>とボソッと妹の声。そして話題が別のことへと移った。そこで音が一旦切れた。やがてマイクに向かった姉がまっすぐ私に向かって語る。<唯今のは、お父さんに盗聴マイクでやられました。今のが家族皆の本心です！>と言う。皆がまたドツと笑った。その後ろでクスッと笑う父親の声が漏れ聞えた。遥かな異国に暮らす私を日々気遣う家族の心労を思えば確かにいたたまれなくなる。<ああ、私って我がまま娘だわねえ！>と内心幾度も呟いた。つまりのところ、父親の興した会社「舞鶴艦船サービス」の月々の収益から私はピンはねしていたことになるのだから・・・。母親が郵便局から仕送りの手続きをしてくれた。毎月私のロンドンの宛先を慣れない英字で綴り、振替用紙に書き込みながら・・・。

そして結局のところ、‘放蕩息子’ではないにしろ、この我がまま娘の私は、言うなれば‘一文無し’で帰国したのだ。その後原宿で個人開業を始めるにしても、まったくもって親にとっては厄介至極な、世話の焼ける娘であったわけである。とことん彼らを自分のペースに巻き込んで、付き合ってもらった。付き合ってきてきた。そうしながらも、親としての彼らの‘値打ち’を知るようになってゆく。私の方にも親

に信用されたいという、ただその一念だけがあった。そのことから私もまた、自分の‘値打ち’というものを僅かながらも知ったとも言えるわけで・・・お蔭を得てどうにか徐々にだが、やがて親のどちらにとっても私は‘自慢の娘’になってゆくわけだが、それがどれほどの安堵であったことか・・・それでもどんなにどうしたって、親の恩に報いるなどできそうにないということを思い知るばかりであった。それから数多の歳月を経て、徐々に老いてゆく両親を看取る時期ともなり、<これって、まるっきり‘鶴の恩返し’だわねえ>って内心溜め息混じりにぼやくこともあったけれど、姉そして妹から <ご苦労さん！チズコさんのお蔭やわ・・・>と言ってもらうことが嬉しくて、それを励みにどうやら踏ん張れたとも言える。

さて、英国滞在中、どんなに家族に呆れられようと笑われようと、彼らに愚痴をこぼすことなど決して出来なかった。それでどんどんわけの分からぬ纏れた糸のようなものが内に膨れあがっていった。そんな折々に本出祐之先生が英国の福祉行政の視察にロンドンにお越しになられた。彼を相手に私は思いの丈を語った。日本語が通じた。先生は淡々と耳を傾けてくださった。それだけで十分に鼓舞される感覚を味わった。その個人レッスンの謝礼はいつも私の持参した和食の手料理であったのだが、とても喜んで食べてくださり、嬉しかった。本出先生は早稲田大学英文科のご出身で、英語には堪能でいらして、翻訳出版も『ケースワーク —心理社会療法』(岩崎学術出版社)『家族ソーシャルワーク』(岩崎学術出版社)『英国ソーシャルワーク史』(誠心書房)など少なくない。先生は、その風貌がいかに古武士のようであったから、どうやら彼の地では‘サムライ’と呼ばれていたらしい。生家は禅寺ということらしいが詳しくは存じあげない。精神分析の知識とか、臨床の知見という以前に、一個人としての堅固さが得難かった。物事に対し偏せず、さまざまな見方を見晴らす包括的視座が備わっており、決してブレない揺るがない方で、私は‘論理(ロゴス)の人’として、彼に絶対的な信頼を寄せていた。かつては私の耳は彼の語る一言一句を聞き漏らさず、まるで性能のいいテープレコーダーが再生する如く、そこにそのままといった具合に彼の言葉が脳裏に浮かんだものだが、もはや今は何一つ記憶がない。墓参をしたくとも叶わない。心侘しい。ところが何でもないふとした瞬間に、自分のなかに本出先生が居ると感じることがある。何かの拍子に自らの内側の眼で捉えた己の眼の表情に本出先生が重なる。敢えて申せば、‘理知的なるもの’の片鱗といった、ある種の‘こころの所作’なのだが・・・そこに僅かなりとも私が彼の精神の‘剛直さ’を摂り込んだ節が覗われ、心慰められる。訃報は、大阪市立大の彼のかつての教え子の一人で、私とはロンドン以来のご縁で親交のあった「家庭擁護促進協会」理事の岩崎美枝子さんから知らせを受けた。電話口で泣き崩れ悲嘆にくれる私を慰めようと、彼女が私におっしゃった。<本出先生の一番のご自慢は、チズコ、あなたなのよ！>と・・・自分の教え子がタヴィストックに留学したということが彼にとってどんなに誇らしかったかと・・・でもそんなこと、生前彼は私に一言もおっしゃることはなかった。われわれ二人の話というのは、いつも「比較文化論」に終始して、私的感情など一切触れることもなかったわけだし・・・この方を師と仰ぎ、そして畏敬したことは私の誇りであった。それはロンドンの思い出として強く心に焼きついている。あの異国で私が孤独で錆び付かず、とにもかくにも意気軒昂さを保てたのは本出先生のお蔭なのであった。このわが師から私が学んだものとは、煎じ詰めていえば《無自覚の覚》と名付けられるかと思われる。「こころが‘充たされる’ことを知っている」という私独自の解釈だが・・・

それだからというのも変だが、全般的にどうも私は彼の地の人たちのどなたにも結局のところ‘懐か  
なかつた’という気がしてならない。どれ程の恩義があるのか、それは重々承知していたとしても、ど  
なたも私にとっては本出先生に比べると幾らかインパクトが薄い。どの方をも深く思慕することはなかつた。  
距離を置いて眺めているふうで。マーサ・ハリスはちょっと別格ではあつたけれど。ちなみに、タヴィで同  
期のアメリカ人のキャロラインなどはく私、マーサ・ハリス、大好き！（I love her!）>と言う。その  
単純さがむしろ羨ましかった。メルツアーもピオンもついに今ひとつで、茫漠とした印象を抱くのみで終  
わつた。あちらでは当時何やら彼らが旋風を巻き起こしているらしいのは肌で感じ取れたが、私には  
現実味が乏しく、タヴィの人々の熱狂を遠巻きに眺めていただけなのだ。さすがフロイト以来の‘エディ  
プスの末裔たち’と言えばいいのだろうか。どうやら西歐的叡智の深い闇、すなわち‘ヒュプリス(傲慢)’  
が煽られている。そうした懸念を覚え、居心地悪いのだった。そこに私は‘無明’というものを臍おぼろに嗅ぎ  
とっていたとも言える。どうにも不遜に聞こえようが・・・。

ところで1979年秋の帰国後の私だが、決して孤立無援ではなかつた。慶応義塾大学医学部の  
小此木啓吾教授とは、ロンドンで開催された『国際精神分析学会』（1975）に渡英された折以来の  
ご縁があつた。その後も折々にロンドンを訪れておいでで、一度などは私もご一緒にアンナ・フロイト宅  
を伺い、彼女を表敬訪問したこともあつた。帰国をそろそろ考える頃に、帰国後の計画を尋ねられて  
だらうか、私がくでも、日本ではどなたとも繋がりがありませんので・・・>と曖昧に答えたら、彼が  
く私と繋がっているということは、大変なことなんですよ>とおっしゃつた。やがて事実は些かその言葉  
通りというわけでもなかつたけれど、取り敢えずは東京をわが臨床拠点としたのであつた。とにかく親を  
安心させることが先決だつたのだから・・・。たとえ此地で迎えられなかつたとしても、それは致し方ない。  
何をしても生きてはゆけるとぼんやりと考えていた。悲壮感はなく、むしろアツケラカンとしている。いつし  
か私もどうやらいのちが逞しく、図太くなつてきているようだつた。所詮大きな期待や抱負を抱いたとし  
ても無理は無理だつた。職探しなどてんから諦めていた。今振り返ると可笑しいのだが、私のロンドン  
からの知り合いで都の福祉局の職員の方がいて、たまたまその方のご紹介で或る児童相談所の所  
長という方に一度お会いしたことがあつた。<どんな子どもの問題を扱われるのですか？>と尋ねられ、  
即座に私はく認識の問題です・・・>と返答したのをはっきり覚えている。つまりのところ、精神分析と  
は自分という意識（無意識を含めて）の総そうざら論、言い換えれば自己点検であり、その要は‘認識愛’  
でもって牽引されてゆくといったことがクライン派なのだから、全然悪びれない。だがあちらはびっくりした  
顔で押し黙つた。ちんぷんかんぷんでどうも噛み合わない。あまりにも日本の現状そして臨床の現場  
から私はずれていた。そのずれ方も半端じゃない。相手に奇異の感を与えるに過ぎないのが分かつた。  
そんな自分をどこへ売り込む気もなかつた。小此木先生はご尽力くださり、あちこちお声を掛けてはく  
ださつたみたいだが、私のような心理職の変り種に恰好のポストが空いているわけもなし、結局は盟  
友・武田専先生（武田病院・院長）に私の身柄を託した。彼にとっての‘切り札’というか、実は最初  
からそれしかなかつたわけで・・・。週二回のパート勤務が始まつた。取り敢えずはということで、そこに私  
は納まつた。正直なところ私の思考回路はまだ英語であり、日本語の語り口もおぼつかないままに成

人の患者さん相手の分析治療をさせてもらえたのだから実に有難かった。そこでカルチャー・ショックも大いに味わった。己の立脚地がいつも簡単にひっくり返される。此地に私は‘誰にも用のないもの’を持ち帰ってきたのだろうかとの不安が脳裡を掠めた。このままでは無用の長物で終わりそうなどといった危惧は絶えずあった。そうした焦慮に駆られながらも、原宿駅から徒歩七分という地の利を活かして着々と個人開業(プライベート・プラクティス)の準備に余念がなかった。自分がどうなってゆくのか保証はない。だが誰かに保証してもらおうことでもないだろうといったわけで・・・そこで俄然児童臨床から成人を対象とする分析治療へとギア・チェンジし、私は未来の「分析の子どもたち」を募った。舞鶴に居た私の両親は内心やきもきしただろうが、黙って成り行きを静観してくれていた。

私にだってここからの未来は予測しかねた。誰にも自分のやることについて説明しようがない。だから失望させないためにも、また期待もされないようにと、大概の彼の地の人たちとのご縁も絶ってゆく。クリスマス・カードのやりとりはしばらくの間続いたが・・・帰国後一度メルツアーとマーサ・ハリスご夫婦にクリスマス・カードを差し上げたことがあった。メルツアーからカードが届いた。それはもう手許にはないが・・・確か、<ご自分のフィールドにおいて存分に力を発揮されるように祈っている>といった、どっちかという素っ気無い文面で。それ以上の期待感が書かれていないことにむしろ私は安堵した。あの当時、彼の著述したものの翻訳出版など、思いも寄らなかったのだから・・・。まだまだ私の日本語はたどたどしかった。臨床の場で使える言語、日本語の「精神分析的言語(psychanalytical language)」がいつ流暢に湧き出てくるものやら、それは時を掛けて待つしかなかった。<日本語で精神分析的に思考する>ということ、それは分析セッションの場のなかでしか醸成されることはなかりと・・・。

小此木啓吾先生は、日本精神分析の伝統を継承する第一人者としての自負と気概に溢れ、その精神分析への憧憬には烈々たるものがあり、あの当時外来の新思想を貪欲なほどに摂取なされていた。そしてどうやら私をもまた一つの‘接木’として、その将来を嘱望されておいでのようだった。今もはや誰の記憶にもなかりかと思われるのだが、先生は『ビオン入門』(岩崎学術出版社 1982)の「監修者まえがき」に語っておられる。<・・・現在の私にとっての課題は、山上女史の語る言葉を読み取ることのできる言語環境を逐次わが国につくり上げる仕事である。本訳書がこの仕事の第一歩となれば幸いである・・・>と。これを眼にしたとき、私はもう身の竦むような思いで尻込みしてしまう。私自身まずは此地に根づくことであり、だからここで座り続けることしか考えられなかった。彼の地での人脈とも疎遠になり、此地での精神分析の伝統を幾らかは承知していても、それとは無縁をとおした。孤塁を守るしかなかった。小此木先生はそんな私を、日本に於ける精神分析のパイオニアで、在野の一開業医であった、かつての師匠・古澤平作先生にどうやら重ねておいでで、<原宿仙人>と私をお呼びだった。それが1980年代の私である。そして多くの歳月が流れゆき、2010年の「開業30周年記念」を期に、WEBサイト【山上千鶴子のホームページ】(<http://www.chiz-yamagami.com>)を立ち上げ、ようやくにして私はそこから精神分析を外へ向けて語り始めた。そろそろ誰かに手渡せるものなら手渡したいという思いに促されて・・・。いつ頃からか、小此木先生の周辺はタヴィストックから戻られた新進気鋭の若手で賑わっていた。私はといえば、ひっそりと‘隠遁者’と噂され、そのように此

地に根を張ることに手間取っているうちに惜しくも2003年に小此木先生は身罷<sup>みまか</sup>れた。生前先生は私の書く拙い文章をとてもお喜びになられた。いつか私が何か書いてくれるものと待ち望んでいらしたのは事実と思われる。だが、ご存命中、小此木先生のご期待にはまったくのところ何ら応えられないまままで来てしまった。そのことが恨めしい。それで今になって、どうか何かしら文章が書いてWEBサイトにアップロードする度に、ぜひとも誰かに読んでもらいたいと思うときなど不意に小此木先生のお顔が浮かぶ。まことに時遅しなのだが、ご案内できたらどんなにお喜びくださったものか、そして誰よりも真っ先にお読みくださったろうにと悔やまれる。

よくぞ生き延びたと思う。ここでひとまずすべてが終わってから言うのも今更ながら気が引けるというか、まったくもって狡<sup>ずる</sup>いとも言われそうだが…。実のところ、彼の地での精神分析の修業なるものは決して「世のため・人のため」などではなかった。『歎異抄』のなかの親鸞の〈ひとえに親鸞一人がためなり〉の言葉に出会い、正直く私もそうだ。私一人が為だった〉との実感がふつつつ湧き上がった。あちらは「弥陀の本願」というわけで、こちらは「精神分析」、それもクライン派の「結束する親対象 (combined parental object)」だからその違いはあれ、どうやら似たものに思われる。どちらにしても‘呼び掛ける声’が聞える。いずれにしても、その招きが〈ひとえに我一人がため〉というのは胸を衝く。内心そら恐ろしくもあつたけれども…。

実に私自身が問題だったのだ。ずうっと幼い頃から私には生きることに不安があった。息切れしそうで、危ういと感じていた。どうにも斑<sup>むら</sup>気というか、何よりも胆力が無い。不甲斐ない私がいる、そんな心もとなさである。こころの内に巢食う怖じ気を私は深く憎んだ。己のごまかしやら騙<sup>だま</sup>しが許せなかった。そして自らのうちで自らを挫かせるものが何か、それを真に知らねばならない。そうでなければ私は生きられないと密かにどうやら考えていた向きがある。この私という脆弱ないのちに挺<sup>てこ</sup>入れする何か、そして誰かが必要であった。探しあぐねるうち、それまで聞いたこともなかった「情緒障害児」・「子どもの心理療法」、そして「精神分析」といった言葉たちに出会った。それらに‘手招き’をされていた！ まるっきり夢遊病的にふらふらとそっちに魅せられて迷い込んで行ったみたいな具合だが…。ここからやがて気がつけば、彼の地に飛び、やがて《クライン派精神分析》へと導かれていた。マーサ・ハリス、それにドナルド・メルツァー、そして彼らの率いるグループの面々との出会いである。それもどこか単なる‘偶然’と私は思っていた。しかしながら、やはりそれは違う。

今彼らのこの共著を手にして、改めて或る感慨を覚えた。マーサ・ハリスにしてもドナルド・メルツァーにしても精神分析に強い‘帰依’意識がある。そこには〈ひとえに我一人がため〉の恩寵 (privilege)を自覚し、その‘信(faith)’があればこそその‘楽観’がお二人には備わっておいでだ。それは周りの誰と比べても引けを取らないし、むしろ数多の著名なる分析家のなかでも稀有な、そんな印象があつた。まさにこれこそが「起点」といえよう。親鸞がそうであったように精神分析もここから始まりがあると思つてはいけないうらうか。そしてその次への転換、〈同朋への呼びかけ〉<sup>どうぼう</sup>がある。すなわち「世のため・人のため」ということになる。真に帰依したがゆえに、それによって自己

は‘働くもの’となる。そしていつしかその自己から他を動かすものともなろう。それが当為となる。仏教ではそれを‘廻心’<sup>えしん</sup>というらしい。彼らはおそらく「社会的責務 social obligation」といった言葉を使うであろうが…。親鸞のいうところの「同朋」<sup>どうぼう</sup>への呼びかけの声、それがこの書を貫いている主旋律であるように思われる。‘親なるもの’の「願」ともいえるだろう。まさにその‘働き’を有している。精神分析がいのちを孕む基点とはまさにこの自覚にあるとはいえないか。個は個として、尚も互いが相共に働き合うのである。精神分析の精髓とは、それに尽きるように思われる。

マーサ・ハリスはこの共著に携わったあと、その翌年には論文‘Tavistock Model and Philosophy’ (1977)を書きあげている。もうこの時点ではオックスフォードへの移転は本決まりであったかと思われる。いずれ「タヴィストック」を去ることを念頭に、シェイクスピアのソネット集のページを繰りながら、「時」のもつ破壊力すなわち忘却を思い、それに抗して記憶の継承はどのように託されるべきかを憂慮なさり、タヴィストックの‘モニュメント’としてこの論文を書かれた。言うなれば、私たち後を継ぐものたちに手渡された《遺書》でもあったろう。今ここで語っておかなければという彼女の切迫した思いがそこに滲んでいる。因みに、私が「タヴィストック」でのチャイルド・サイコセラピスト養成コースを修了し資格認可を受けた折、彼女はその柔らかな微笑をたたえ、<チズコは日本に戻られたら、パイオニアにおなりなのね>とおっしゃった。彼女は私の未来に何を夢見たのだったろうか。もはや手の届かぬ遠い異国で孤軍奮闘するであろう私の姿を一瞬思い、そうした未来の私にレスペクト(respect/敬意)を惜しまなかったものと思われる。そこではもはや「タヴィストックの伝統」も、彼女個人ですらもはたしてどこまで意味を持つものやら心もとないのは重々承知していたものと思われる。だから去り行く私に対して彼女は飽くまでも慎み深く謙虚であった。私もまた何ら返す言葉を持たず、ただ曖昧に微笑したのみであったのを覚えている。帰国後の私の未来なぞ実に曖昧模糊としたものでしかなかったわけで、それにあの頃の私には彼女の胸中を思い巡らすほどの心の余裕などなかった。そしてその後の長い歲月、彼の地は忘却の彼方へと遠ざけられ、私はマーサ・ハリスを振り返ることも久しくしてはいない。まるで‘記憶喪失者’の如く…。

一方のメルツァーとは言えば、すでに論文‘Toward an atelier system’ (1971)がある。精神分析が職業化してゆくことへの弊害。研修制度が硬直化し、資格づけによって志願者本来の熱意が削がれるといったことや、体制に絡み取られ、飼い馴らされてゆくことへの危惧感やら…。それで広く門戸を開放せんとする心意気に溢れている。そんなふうには彼はその独自色を強めていっていたわけで、この著述(1976)もまたそうした流れの一つに思われる。そこにはまた、精神分析の未来に夢馳せての彼らなりの決断が覗かれる。「エスタブリッシュメント(クライン派権威筋)」との亀裂も覗かれよう。それなど、私と関わりがあろうはずもないと思っていた。だが今は違う。

さて、帰国後の私はいつの頃からか旧約聖書を読み耽っていた。ブーバー研究者としても著名な宗教学者・植田重雄先生(早稲田大学名誉教授)との奇しき邂逅があり、深く傾倒した。「朝日カルチャーセンター(新宿)」からやがて「早稲田奉仕園」へと場所を変えたが、さまざまに啓発され、大いなる

内的促しをいただいた。銀座の「教文館」でヘブライ語に親しむ契機を得たのもその一つだが、それも偏に精神分析の根幹にある「ヘブライ的思惟」なるものが私の内で切実に希求されていたからなのであった。旧約聖書、殊に預言者のことばは私の心に深く沁み、烈しく揺すぶられた。人は神に背き、性懲りなしに悔い改めることを知らない。それでも神は深い嘆きでもって訴える。〈あなたの名を呼ぶ。あなたを贖う〉と…。イザヤ書の神のことば、その悲痛なる声に胸打たれた。ああ、人間というものはとことん神に背くものなのだ。だが、そこにこそ人間としての自由がある。これが‘聖書の民’と言われるユダヤ民族の精髓なのだと知る。フロイトをはじめ多くの傑出した人材を輩出した所以がここにある。彼ら民族の底力に突き当たった気がした。〈子どもというのは親に背くもの〉というのが私の持論の一つだが、それはここから来ている。それでも尚、その親に名を呼ばれることなくして子に安心はない。親からの赦しがなければ心は荒む。この自己撞着を生きているのがわれわれ人間であろう。そこで、この「贖い(redemption)」ということばに痛く執着した私がいるわけで。そこでクライン派の空白のページに書き足すことにした。抑うつポジションの後に「贖いのポジション(redemptive position)」というものを…。「贖われる・贖う」ことへの積極的な意味づけである。この‘親なるもの’との内なる邂逅にしか突破口を見出せなかった。日々の臨床のなかで見えるのは底知れず深い漆黒の間であったのだから…。おそらくこの「弥陀の本願」にも一脈通じるであろう 〈あなたの名を呼ぶ。あなたを贖う〉 との‘親なるもの’の言葉が命綱であった。‘親なるもの’を心の内に頂いた臨床家というものは、そのためには‘手’を持つこと、‘心’を持つことが問われてゆく。‘言葉’を持つことに負けず劣らず…。ここに、まさにW. R. ビオンの貢献があると言えよう。「肯定的な投影同一視(positive projective identification)」そして「コンテインメント(containment)」など…。クライン派も1970年ごろから徐々に風向きが随分と変わってゆくのである。マーサ・ハリスもドナルド・メルツァーも、まさにその‘風’に乗った。それも、彼らほど苛烈だった人はいなからう。クライン派でも彼らほど「combined internal parental object(内なる結束した親対象)」というものを理念の中核に据え、それと一体化し、実践に赴いたひとたちはいなからう。オックスフォードを拠点に、彼らの海外講演旅行、そして執筆・出版活動が精力的に展開されてゆく。それも‘同朋’への呼びかけであったろう。そう思えば腑に落ちるのだ。‘親なるもの’に帰依し、それに促され、親なるものとしての‘働き’をする。つまりは、彼ら自身がやがて‘贖いの器’となったと言えるのではなからうか。このように精神分析家というものが‘働くもの’といった観点を持つことを愛でたい。その実践書の一つがこの書であろう。

この書に綴られているのはおそらくメルツァーの文体だろう。精巧で緻密な論理に貫かれている。だが、そこには熱き思いがある。それを汲み取ろう。精神分析の恩恵をごく一部の限られた人々に封じ込めず、広く世に光をもたらすものにしないでほしいと彼らなりの‘願掛け’であり、まさにその用意周到なる実践書と言えなくもない。

これまで精神分析は‘人のため’になるとしても、はたして‘世のため’になるかどうかという点はまともに論議されてこなかったのではないか。今日人と人とは因縁を持ち合うことに希望はあるのかという問いかけが頭を擡げる。だからこそ家族も地域コミュニティ(社会)も視野の内に入れる必要がありそうだ。

個人主義が市民権を得た現代においても、個々は家族そして社会と<sup>なま</sup>縋い<sup>ま</sup>交ぜになり<sup>よ</sup>繕り合いながらの現存であることは否めない。そこに於いてはどうかマルティン・ブーバーのいうところの〈われーなんじ〉の関係性の具現化という視座、また殊更にく『親なるもの』の陶冶〉といった課題が必須として希求されてゆくように思われる。誠実(sincerity)が涵養されるか、或いは偽善を孕み、不実という罪が<sup>まんえん</sup>蔓延してゆくか、彼らの透徹したまなざしが注がれている。まさにここに〈個人・家族・社会共同体〉それぞれの関わりについて微視的および巨視的な視座が展開され、論究されている。何やらわくわくと心躍る。そもそも精神分析的恩恵を広く一般社会に還元したいというのが彼らの悲願でもあったわけだが。この書に於いて〈精神分析は、「世のため・人のため」に果たしてなるや否や〉という問いに<sup>ま</sup>応えて敢然と〈然り(YES)！〉が唱えられている。この論文はその意味で実に野心作といえよう。

ちなみに、私は心密かにメルツァーを先鋭的な『近代的ヘブライ人』と呼んでいる。彼は此の世に〈われーなんじ〉の人格的交わりの実現化を祈願し、そのために此の世に<sup>はびこ</sup>蔓延るあらゆる〈われーそれ〉の関係性(すなわち他の人間を一個の事物にひとしいものとして手段化するといったこと)に徹底して糾明のメスを入れ、弾劾する。例えばその一つ、敢えて名指しされておらずともナチ政権下でのドイツが髣髴する。不実、欺瞞、虚偽、冷酷無比、それら底知れぬ深い心の闇、いわば悪の実在性を知ることメルツァーは勇猛果敢である。そこに容赦ない峻烈さを発揮する。それにマーサ・ハリスの心性に深く根ざす「共同体精神(communality of spirit)」が呼応し、さらに挺入れする。(その若き教師時代にマルティン・ブーバーの対話に基づく教育理念に触れ、強く感化されたということも大いにあり得よう。)子ども個々の生を、それを抱える家族、教育現場そして社会共同体といった環境に位置づけ、そこに〈われーなんじ〉の人格的対話的交わりが連携され、相互に培われることの理想がここで謳われている。飽くまでも個としてのそれぞれの人格性(パーソナリティ)の自由闊達さが祈念されている。断じてそれは拘束やら硬直化へと墮することがあってはならないという戒めがある。

そして、ここにメルツァーの文章を目で辿りながら、ふいに『欣喜雀躍』という言葉が脳裏に浮かんだ。思わず笑みがこぼれた。メルツァーにとってこれを書き著すことはどれほどの喜びであったろう。傍らのマーサ・ハリスと共に語らいながら、彼は己の『内部の声』に耳を傾け、その対話から促され導かれたものを諄々とわれわれに説いてゆく。彼の裡に潜む深い安堵、そして喜悦が感じられた。それからふと思いついたことがある。メルツァーはかつてこんなことを語っていたらしい。自分は『種撒く人(the sower)』であり、マーサ・ハリスは『耕作者(the cultivator)』であると…。その意味でもこの共著は豊饒なる彼ら共有の『<sup>みの</sup>実り』の一つともいえよう。彼ら、この『最強の二人』ともいうべきカップル、それはまことにわれらにとって『親なるもの(parental couple)』の名に<sup>ふさわ</sup>相応しい。その有する『願』をわれらもまた心の内に摂り込み、生かし続けてゆくことが、『人のこころの育ち』を支援するわれら専門職の実践に於いて必須課題になろうかと思われる。

精神分析は、それぞれ個々に<sup>おの</sup>自ずから『願掛け』となることが期待されてゆくというのが私の持論の一つだが、それがどのようにして現実味(reality)を持つかが問われてゆく。理念ではなく、実践、つまり

‘働くもの’としてなのである。メルツァーおよびマーサ・ハリスというお二人が自らの生涯を振り返り、親なる内的対象への‘信(faith)’が精神分析に携わることでこそ醸成されたことを悟り、尚も切磋琢磨し、やがて己のいのちの終焉を迎えなくてはならないとき、その想いが次の者たちのいのちへの呼びかけとなるのは必定であったろう。おそらく精神分析家としての彼らの臨床に根差した知見は、<人は何のために生きるのか>と問うとき、それは<‘親なるもの’を心の内に陶冶せんがため>といった答えに突き当たったのではなかろうかと思われる。そうした素朴な‘願’を携えて日々励むのがわれわれ人間というものではなかろうかということでもある。そして、人と人とが出会う場に於いて「親なるもの」は働いている。そして働いてゆくのである。もしあなたが親になれたなら、家庭のなかで親として、もしあなたが教師になれたのなら学校の現場で、そして心理臨床家ならば臨床の場で…。それぞれの持ち場でということになる。彼らお二人もそうであったと思うことは私にとってどれほどの慰めか。斯くして、ここに「私の成り立ち」を綴ったわけだが、遙か時空の隔たりを越えてみたとき、振り返ると何とそこに彼らとの因縁があった。この彼らの共著はそうした記憶を呼び覚ます一つの契機となった。私にとって亡き両親(山上昇・ツル工)は一番身近な‘同朋’であったと言える。掛け替えのない人たちであった。<誰かの子どもであることの嬉しさ、またひとの親になることの幸せ>を教えてもらった。そしてマーサ・ハリス及びドナルド・メルツァーにもまた…。それら尊き<sup>えにし</sup>因縁を喜びたい。深い感謝の念を込めて…。

さて、最後に一つ付け加えておこう。監訳者の木部則雄氏は、この巧緻な論理で構築され、卓抜な構成力を持つ文章が日本語訳されても読者が今ひとつ感興を覚えられないのではないかと危惧され、私に「解題」を依頼された。勿論その任ではないと一旦はお断りしたわけだが…。この書は言うなれば、新鋭の「パーソナリティの発達理論」である。心の痛み(mental pain)を真正面から採り上げ、それを主軸として展開されている。徹頭徹尾‘内面’重視である。実にユニークな書であり、多くの人にとって耳慣れない‘新しい言語’ともいえよう。ここには、学校現場に限らず、それぞれ異なるフィールドで対人援助に携わる専門職の方々に向けて、クライン派精神分析家の臨床知見を背景とした基本理念が提言されている。対人援助の技術に挺入れし、その裏づけとなるところの価値理念は必要不可欠であろう。だが、われわれ日本人には最も関心が薄い。この視座を借りて、それぞれ家庭、教育現場そしてファミリー・ソーシャルワーク分野などに於いて、実践的な援助技術がさらに試されてゆくことも有意義かと思われた。それぞれに臨床実践のなかで何やら気づきが拾えそうではないか。プロとしてのセンス、またそれぞれ個々人のセンスが問われてゆく。はてさて、興味は尽きない。ところで、この書には実にクライン派のエッセンスがふんだんに盛り込まれている。臨床知見もギョッと圧縮されて詰まっている。含蓄がある。だが、それを味わうには読み手の咀嚼能力が試される。それらはどう説明されても今ひとつ何だかしっくり来ない、全然イメージが湧かないといったことになりはしないか。この本をなんとか面白く読んでもらうにはどうすればいいのかと苦慮なさっておいでの木部氏に応え、私個人としては今こそわれわれのうちの‘親なるもの’が覚醒され陶冶されてゆくことが必須と思われ、それを大筋のテーマとして大胆にもこのような「私語り」を敢えてここに公開する運びとなった。私の意図はそれ以上ではない。常日頃、木部氏は児童臨床の現場で、わが国の子どもたちがそして親たちもまた疲弊し枯渇してゆくさまに立ち会われておいでで、この日本の現代というものの底知れぬ混迷の間

の深まりにいよいよ危機感を募らせ、憂慮されておいでなのを伺い、私もまたそれに呼応し、その意向を汲んでこの「解題」に取り組んだことになる。それで実に思いがけず、「私の成り立ち」が見えてきた。ほんとうに昔々を手繰り寄せ、感慨に浸り、私はいろんな人に出逢ったんだなあ、そしていろんな人に育てられたんだなあ、しみじみと素朴にただ嬉しかった。それら誰も彼もが、大人もそして子どもらも、私の中でいつしか‘親なるもの’となっていた！そして現に生きており、尚これから先も、私は彼らによって生かされてゆくであろうと信じられたのである。こうした「内なるファミリー(inner family)」の絆、即ち‘いのちの繋がり’を心の深奥に携える一人の心理臨床家として、私はこの道を着実に一步一步踏み固めながらわが歩みを進めてゆくことを祈念している。そして、まことにこれこそがこのメルツァーとマーサ・ハリスの共著で彼らが言わんとするところの骨子でもあろうかと思われる。斯くして、ようやくにして彼らに出逢えたようで、何やらわが身内を一瞬深い安堵が駆け巡った。

2016年9月 草叢にコスモスの花の揺れる初秋を迎えて